

学 位 請 求 論 文 要 旨

中国の大学日本語教育における
ピア・リスニングの実践研究
— 日本語専攻生を対象に —

2022 年 8 月

城西国際大学大学院 人文科学研究科
比較文化専攻

顔 欒蘭

1. 問題提起と本研究の目的

近年、外国語教育理念の進展に従い、中国の大学外国語専門教育において、「協力」、「創造」、「自律学習」などの能力の育成が重要視されてきている。しかし、筆者の勤務大学の日本語専攻授業では、従来型の教師による一方向的な指導が行なわれており、前述した能力の養成は困難な状況にある。教師主導型の授業上の問題点を解決する方法の一つとして、筆者は勤務大学でピア・リスニングを取り入れた聴解授業の実践を試みた。

ピア・リスニングは、横山他（2009）により定義づけられ、池田・舘岡（2007）が取り上げたピア・ラーニングの理念に基づき、学習者間の協力を通して学びを進める教育方法として、日本語教育において取り入れられてきた。池田・舘岡（2007, p. 57）では、ピア・ラーニングのメリットとして、リソースの増加と理解の深化などの認知面と、社会的関係性の構築、学習への動機づけなどの情意面における効果を挙げている。それらの効果は、中国大学日本語専攻の授業にピア・リスニングを導入した場合においても、同様に得られると筆者は考えた。

そこで、本研究では、ピア・リスニングを中国の大学の聴解授業に導入し、その授業において、学習者間のピア活動はどのようなプロセスで行なわれているか、さらに、ピア・リスニングの導入が学習者の認知面と情意面には、どのような効果を与えるのかを明確にすることを目的とする。

2. 研究方法

本研究では、ピア・リスニングを取り入れた授業を実践1と実践2に分けて実施した。両実践終了後、それぞれの実践対象者にアンケート調査を行なった。

まず、実践1では、「事前活動」、「聴解活動」、「ピア活動」、「発表・質疑活動」、「内省活動」などのセッションを組み込んだ実践授業を4回実施した。実践後、ピア活動における学習者間の発話データについて、タスクシート及び内省シートの記入内容と照合しながら分析し、学習者の認知面と情意面に役立ったピア活動のパターンを明らかにした。次に、実践1で得られた結果を生かした上で、実践2を12回に渡って実施した。実践2のタスク解決結果を踏まえ、ピア活動の発話データについて、タスクシートと内省シートの記入内容と照合し、分析・考察した。その結果、12回に渡る授業で、学習者の認知面と情意面において生じた変化を明らかにした。最後に、両実践終了後、それぞれの対象者にアンケート調査を実施した。調査結果を分析・考察することにより、実践1、2の対象者の、ピア・リスニング授業への評価、及びピア・リスニング導入による認知面と情意面の変化への受け止め方を明らかにした。

実践1、2で収集した発話データの処理・分析方法については、まず、宇佐美（2019）の基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese : BTSJ）改訂版と宇佐美他（2007）の基本的な文字化原則の中国語版（Basic Transcription System for Chinese : BTSC）に従い、文字起こし処理を行なった。次に、文字起こしした発話データを、胡方方（2018）が用いた発話機能ラベル貼り付けの方法により分類した。最後に、ピ

ア活動における発話データを話段単位で分割し、タスクシート及び内省シートに記入された内容と照合して分析した。

アンケート調査については、実践1、2終了後、それぞれの17名と23名の対象者に、調査票を配布し、実施した。調査票は、「ピア・リスニング授業に対する感想」、「ピア・リスニング授業への取り組み」、「ピア・リスニング授業を通しての変化」、「アドバイス」の4つの項目から構成されている。分析については、それぞれの項目の中で設定した、5段階評価、選択問題、及び自由記述などの質問への回答結果に基づき、課題の解決をめぐる分析・考察した。

3. 各章における研究内容及び結果・考察

本研究は以下の7章から構成されている。

第1章の序論においては、まず、本研究の背景を示し、問題提起をした。次に、本研究の対象となるピア・リスニングを日本語教育に導入する意義及び期待される効果について検討した上で、本研究の目的と研究方法を示した。最後に、本研究の構成を示した。

第2章においては、本研究の理論的背景を示し、ピア・リスニングの考察を行なう際に依拠する理論を説明した。具体的には、協働学習の概念、発展、ピア・ラーニングの概念、及び効果について述べた。また、この理論を実践に応用する際の方法についても示した。

第3章においては、以下のようなピア・リスニングに関する先行研究について述べた。

まず、ピア・リスニングの概念及び日本語教育における位置づけを示した上で、ピア・リスニングの実践研究を概観した。それらの研究の中には、ピア・リスニングの導入した聴解授業の実践可能性を示した研究（岡崎，2001；市嶋，2005）の他に、ピア・リスニングを導入した聴解授業の効果を示した研究（王璐，2008；杜艶，2009；ショリナ，2008；横山他，2009；金志宣，2010；中井，2015；毛利，2015；プーピンピユ，2017）もある。

次に、ピア・リスニングの認知面の効果に関する研究（市嶋，2005；王璐，2008；杜艶，2009）では、ピア・リスニングが、語彙量、聴解ストラテジーのようなリソースの増加に役立つことを示した研究、ピア・リスニングの理解深化に対するプラス面の効果に言及した研究（ショリナ，2008）などを示した。しかし、それらの効果とピア活動との直接的な関係を示した研究は見当らなかった。

最後に、ピア・リスニングの情意面の効果に関する研究（金志宣，2010；王文賢，2014）では、ピア・リスニングが、動機づけ、自律学習の習慣づけ及び協力的な意識の育成などにプラスの影響を与えたことを示唆した研究を示した。しかし、ピア活動がどのように情意面に影響を与えるかを示した研究は見当たらなかった。

以上、先行研究における問題点を検討した上で、本研究の方向と実践方法を示した。

第4章から第6章までは、本研究の中心的な部分である。

第4章においては、実践1をめぐる考察を行なった。実践1では、実践後、収集したデータを分析し、実践1で設定した課題1、2を解明した。

課題1については、ピア活動における、①進行指示→②解答提示→③理解構築→④解答議論→⑤解答形成→⑥理解拡大という6つの段階を踏むプロセスを解明した。

課題2については、ピア活動をタスク解決結果により、合意正答、合意誤答及び各自別答の3種類に分け、それぞれが導き出されたプロセスにおいて、認知面と情意面に役立った活動のパターンを、話段例を分析することにより明らかにした。

第5章では、実践2に関する考察を行なった。実践2では、実践1で得られた考察結果を生かした上で、ピア・リスニング授業を実施した。実践後、収集したデータを分析し、実践2で設定した課題1、2について、検討した。

課題1については、実践2の全授業における266の話段におけるタスク解決結果から、合意正答の比率が上昇していたのに対し、合意誤答及び各自別答の比率が下降していたという結果を示した。その結果を踏まえ、実践対象者の参与した話段への分析・考察により、対象者のピア活動への取り組み及びタスク解決手段における変化が、その原因であることを明らかにした。そこから、ピア活動により、実践対象者の認知面と情意面に変化が生じたことが示されている。

課題2については、認知面では、ピア活動を通して、語彙や統語に関する知識の増加、推測ストラテジーの意識的な使用、及びテキスト内容への理解の深まりが促されていた様子が見られた。情意面については、学習者間のピア活動が「学習への動機付け」及び「協力的な意識」を高め得るという示唆を行なった。

第6章においては、両実践の対象者にアンケート調査を行ない、調査の結果を分析・考察することにより、実践対象者がピア・リスニング導入による効果をどのように受け止めたかを明確にした。まず、両実践の対象者は基本的に、ピア・リスニング授業の効果を認めているが、実践2の対象者は、実践1の対象者に比べ、ピア活動に対してより肯定的な意識を持っていた。次に、対象者のピア活動に積極的に取り組めた理由に関する回答の内容から、実践2の対象者は、実践1の対象者よりピア活動への取り組み意識・意欲ともに強かったことが分かった。最後に、実践終了後、両実践の対象者ともに、ピア活動による学習成果を意識しており、実践2の対象者は、「理解構築の方法」、「語彙や文法知識」、「聴解ストラテジー」及び「協力的な方法」などの面における、ピア活動のさまざまなメリットをより強く意識していたことが分かった。

第7章では、本研究の考察結果のまとめを行ない、本研究の意義について述べ、今後の課題を展望した。

4. 本研究の意義

本研究では、ピア・リスニングを取り入れた実践授業を行なうことにより、ピア活動における学習者間の相互活動のパターン、及び学習者の認知面と情意面の変化について考察を行なった。本研究には、以下のような意義があると考えられる。

まず、中国の大学における日本語専攻の聴解授業へのピア・リスニングの導入方法を示した。実践2では、実践1の考察結果で明らかにした、認知面と情意面に役立った活動のパターンを促すよう、授業上の工夫を行なった上で、ピア・リスニング導入の授業を実施した。実践2で得られたさまざまな成果は授業上の工夫がもたらした結果であると言えよう。

次に、ピア活動プロセスの分析方法の独自性が挙げられる。本研究の実践1では、発話機能からピア活動のパターンを分析するという方法を用いた。その分析方法により、話段の展開からタスク解決へと至るプロセスを解明し、学習者の認知面と情意面に役立ったピア活動のパターンを明らかにした。従来のピア・リスニングの実践研究では、発話の内容を分析し、考察を行なったものが多く、発話機能に対する分析からピア活動のプロセスを考察したものは、見当たらない。従って、本研究の発話機能からピア活動のパターンを分析する方法は、今後のピア・リスニングに関する研究に資する分析方法となり得るだろう。

最後に、今後の、聴解授業におけるピア・リスニングの導入に向けての方向性を示した。従来の聴解授業では、主に学習者の聴解能力の向上を中心的な目標としてきた。従来型の授業にピア・リスニングの導入を行なえば、聴解能力の向上だけでなく、語彙や統語に関する知識の増加、推測ストラテジーの意識的な使用、学習への動機づけ及び協力的な意識の向上をも期待できることを示した。

5. 今後の課題

今後、中国の大学における日本語専攻生を対象者としたピア・リスニング授業の実践により、学習者の認知面と情意面だけでなく、他の面における効果をも続けて検討していくことが課題として残されている。また、実践の際に、実践対象者の日本語レベル、出身地、文化背景などの面の差異を考慮に入れた上で、ピア・リスニング導入による効果を検証していく必要があるだろう。